様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　1　日現在

機関番号：25502
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：21720072
研究課題名（和文）文政年間刊の読本をめぐる江戸・上方間の書物交易〈本替〉の実態調査

研究課題名（英文）The research of book-trade during the Bunsei era(1818-1830)

研究代表者
木越　俊介（KIGOSHI SHUNSUKE）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：80360056

研究成果の概要（和文）：
本替については、調査の過程で状況証拠となるものしか提示できないことが判明したので、上方読本と江戸読本との内容的な差異や類板の問題について考究した。その中で、従来、文政年間に刊行されたとされてきた武内確斎作『絵本室之八島』について注目し、研究史上初めて「文化五年」の刊記を有する早印本を発見し、作品研究を行った。その結果、上方読本の中でも極めて江戸読本の作法に近い作風であることが分かった。

研究成果の概要（英文）：
It became clear that book-trade had just circumstantial evidence through researches. So I made differences clear between Edo and Osaka Yomihon. I corrected published year of "EHON MURONOYASHIMA"(by TAKEUCHI KAKUSAI) and indicated that it had near features to Edo Yomihon.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近世文学

１．研究開始当初の背景

「本替」とは、本屋（貸本屋も含む）相互の書物の等価等量交換の謂いであるが、「本替」についての研究は極めて少数であり、江戸時代の書籍史においては佐藤悟がリードし、研究代表者が近年精力的に調査、発表しているのみであった。

「本替」はいわば商習慣に属するため、公文書などにその記録は残らない。従って、諸記録と残存書籍を対照し、さらに曲亭馬琴などの書簡、日記などの私的な記録から再構成

していくしかない。そうした状況の中で、研究代表者は、これまで、記録類が豊富に残されている文化年間に絞り、仮説を立てながら当該書籍を網羅的に調査してきた。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者がこれまでの研究において培った方法論と、それにより得た成果をさらに発展させ、文化期に活性化したと見られる「本替」が、続く文政年間（1818-1830）において、どのように継続もしくは変質していたのかを明らかにすることを目的とする。特に江戸と上方間の取引を中心に、ネットワークの諸相を解明していく。

３．研究の方法

「本替」の実態を把握するには、

（１）対象とする時期の、江戸・上方双方の書物の奥付（出版情報）を網羅的にデータ化することが最も重要であること
（２）その際、広告などにも注目することで、複数の板元が名を連ねる書物における各本屋の関係が判明すること
（３）当該書物の冊数が交換条件の前提となっていること

などの方法論や着目点があることに気づいた。本研究で対象とする文政年間は、江戸側の公的な記録類が少なくなるものの、これまでの調査で『大坂本屋仲間記録』(全 18 巻、清文堂）を精査することの有効性が判明しているので、引き続きこの記録群を繙きながら、それと平行して文政年間に板行された読本一点一点の書誌調査を行うこととした。

文政期に板行された読本は　112 タイトルにのぼる。文政期については、『大坂本屋仲間記録』所収の「出勤帳」を踏まえながら図書館など所蔵機関ごとに効率のよい調査を計画的に行った。

調査そのものは最初の２年間に多くを行い、２年目後半から３年目前半にかけては、データ解析に多くの時間と労力を費やした。また、調査の非効率性を最小限に留めるため、各作品の奥付に記される江戸と大坂の本屋の組み合わせをデータ化することを基礎作業においている。これにより、万が一有力な手がかりが見いだせなくとも、本替に関与した本屋の名寄（リスト）と彼らのネットワークを確実に見極めることができると考えた。

４．研究成果

１年目は資料調査とそのデータ整理を中心に行った。当初の計画より調査資料の点数は少なかったが、対象資料を絞り込んでいたため、効率のよい調査を行うことができた。その過程で『大坂本屋仲間記録』所収「裁配書」の記録から以下のことが判明した。

（１）　文化年間後半から文政期にかけて、記録に残されるだけで以下の書物が、各地域の本屋仲間内での回覧の手続きを省略して出版を行っていること（タイトル・出版地・書肆名の順で記載）

絵本浅草霊験記〈京〉　塩屋長兵衛
絵本忠臣蔵後篇〈京〉　扇屋利助
紀伊国名所図会〈和歌山〉　河内屋太助
紀伊国名所図会二篇〈和歌山〉　河内屋太助
感応清正真伝記初篇〈京〉　倉橋屋四郎兵衛
双蝶記〈江戸〉　河内屋太助
骨董集上篇上中之巻〈江戸〉　塩屋長兵衛
新編熊阪説話〈江戸〉　河内屋嘉七
朝夷巡島記〈江戸〉　河内屋太助
景清外伝〈江戸〉　塩屋定吉
里見八犬伝第二輯〈江戸〉　河内屋太助

景清外伝松の操（後篇）〈江戸〉塩屋長兵衛（後略）

（２）１に該当する本屋は、大坂の河内屋・塩屋系統が多いこと。
（３）これらの作品の中に、既に本替の対象となっていたことが明らかなものが複数含まれていること。

これらをふまえ、仲間内の回覧を省略する（これは、後に類板などで訴えられる危険性と引き替えである）理由の一つに、本替があると推測した。すなわち、本替というシステムにおいては、出版が予定通り行われないことや、出版過程においてトラブルが発生することが致命的となることがあり、これを回避するためであると考えた。裏返せば、読本の類板問題がそれほど多くはなかったこと、さらに発生しても多くは示談で解決できるレベルであったことを示しており、この面からも考察した（以上の研究成果は、下記研究論文「読本と類板―文化期の大坂を中心に」にまとめた）。

２年目は、引き続き文政年間刊の読本作品の調査を中心に行った。特に奥付の刊記に注意を払い、可能な限り複写をし、内容を吟味した。とはいえ、本替という現象をつかむための大きな手がかりとなるようなものは得られず、少し研究の方法を変える必要も迫られた。当初から予想はしていたが周辺資料が少ない中ではやはり状況証拠となるものしか提示できず、何か別の視点が必要であると考え、そうした問題意識を持ちながら研究を行った。その結果、本替という点に拘泥せずに、いまだ未解明な点が多い文政期の読本そのものを多角的に理解していくことが、長期的視野に立てば生産的であると考え、ともかく実直に作品を読み、また特殊な問題点を有するものには特に注意を払った。その中で、従来『国書総目録』などでは文政年間に刊

されたとされてきた武内確斎作『絵本室之八島』（二世玉山画）という上方読本について注目し、刊年の再検討を含め多くの問題を含むことが分かった。

また、文政年間の読本作品の問題点として、長編化の傾向が強いこと、また他の作者の嗣作（続編）などが目立つことに気付き、こうした点にも注目して作品の読解をすすめた。

最終年は、「文化五年」の刊記を有する『絵本室之八島』の早印本を研究史上、初めて発見したことを受け、作品研究を行った。その結果、上方読本の中でも極めて江戸読本の作法に近い作風であることが分かった。例としては、作品の細部を考証で固めていること（『吾妻鑑』が最も多用されている）、曲亭馬琴・山東京伝の文化二～四年刊の読本作品（『新累解脱物語』、『勧善常世物語』、『善知安方忠義伝』、『昔話稲妻表紙』）を研究した上で、構成法などを深く取り入れていること、さらに、同時期に「類板」とされた（すなわち趣向上多くの類似点を持つ）上方読本『竹篦太郎（しっぺいたろう）』（栗杖亭鬼卵作）と比較した結果、登場人物の背後にいる猫や犬の霊力が、『絵本室之八島』では超越的に描かれるのに対し、『竹篦太郎』ではあくまで人間の意志に隷属するものとして扱われるという大きな相違点が認められた。全体として、『絵本室之八島』が極めて江戸読本的な特色を多く有することを明らかにした。この成果を、論文「武内確斎『絵本室之八島』考」としてまとめた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①木越俊介「武内確斎『絵本室之八島』考」
『上方文藝研究』９号、p.55-68、2012

年、査読有

②木越俊介「読本と類板―文化期の大坂を中心に」
『江戸文学』（ぺりかん社）42 号、p.61-p.73、2010 年、査読なし

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
木越俊介（KIGOSHI SHUNSUKE）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：80360056

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：